

★FITNESS
CLUB

新規NPCイラストコスチューム

トレーニング ウェア



CLOSERS
DIMENSIONAL CONFLICT

その男は、毎日夜明けと共にトレーニングを始める。

ユニオンオオトリ支部にある、クローザー専用のジム。

再び古巣に戻った日から、

男は1日も欠かさず夜明け前に起床し、このジムに訪れた。

わざわざユニオンに掛け合って、誰もいない時間にたった一人で利用するのは、

同僚や、後輩であり自身が管理するクローザーたちに

トレーニングする姿を見せたくないからだ。

訓練をさせる立場である自分の訓練姿を見せることはできないと、

男は思っていた。



「トレーナー」

その女は、毎日誰もが寝静まった夜中にトレーニングを始める。

ユニオンオオトリ支部にある、クローザー専用のジム。

再び作戦に復帰することを決めた日から、

女は誰にも、息子にすら何も言わずにこのジムに訪れた。

わざわざユニオンに掛け合って、誰もいない時間にたった一人で利用するのは、

他のクローザーたちに自分がトレーニングする姿を見せたくないからだ。

クローザーとしてあまりにも有名すぎるために、

自分の存在が他のクローザーたちの訓練の邪魔になってしまうかもしれないと、

女は思っていた。



「夜遅く、最後に器具を使用しているクローザーへ

いきなりこのようなメモが残っていて、さぞ驚いたことだろう。

どうしても伝えたいことがあり、ペンを手にした次第だ。

どうか運動器具を大切に扱ってほしい。

訳あって早朝にこのジムを利用しているのだが、

毎度毎度、器具のどれかが壊れているのは困る。

毎回スケジュールを変更せざるを得ず

予定通りにトレーニングが行えないのだ。

そちらが位相能力者専用器具を破壊するほどの怪力の

所有者であることは充分理解したので

運動器具相手にもどうか手加減してやってほしい。

これはお互いの、そして他の利用者のための助言でもある。

考えてもみてほしい。ここが戦場で、運動器具が我々の武装だ

自分自身の首を絞めていることになるだろう?」



「アサコ・カグラギ」

「夜明けにトレーニングしているクローザーへ！

本当にごめんなさい〜。〇

久しぶりのトレーニングで、なかなか力の加減ができなくて〜

今日もひとつ壊しちゃったのよ〜

どうしましょう！本当に申し訳ないわ〜！

明日からは気を付けます〜！

それにしても、朝早くからトレーニングなんて、

素晴らしい心がけね

仲間として心強いばかりよ〜

これからもお互い頑張りましょ！

美しくて実用的な筋肉をつけて、

一緒に人類を守りましょ〜



「夜明けにトレーニングしているクローザーへ！本当にごめんなさい〜。〇(°□°)°〇
久しぶりのトレーニングで、なかなか力の加減ができなくて〜今日もひとつ壊しちゃったのよ〜
:(°□°):
どうしましょう！本当に申し訳ないわ〜！明日からは気を付けます〜！
それにしても、朝早くからトレーニングなんて、素晴らしい心がけね(*>ω<*)
仲間として心強いばかりよ〜(*/□/*)
これからもお互い頑張りましょ！
美しくて実用的な筋肉をつけて、一緒に人類を守りましょ〜(°:H:)g!!!」

波ダッシュと顔文字に溢れるメモを見て、

男は苦笑いを浮かべた。

一緒に人類を守ろう、とは。

自分にとって遥か遠くなったその使命を、こんなにも軽く、しかしはつきりと言えろとは。

どれだけ強く自信溢れるクローザーならばこのような発言ができるのか。

男はメモの書き手のことが気になったが、あえて追及はしないことにした。

その代わりに、壊れた器具を眺めてこう考えた。

これだけ力のある、自信満々なクローザーが存在するのなら……

「人類にはまだ、希望が残っているのかもしれないな。」



超重量特殊合金ダンベルを上げ下げしながら、女は苦笑いを浮かべた。

あの堅く真面目な文体のメモの中身を思い出したからだ。

ここが戦場で器具が武装だったとしたら、自分自身の首を絞めているのと同じ、とは。

女には、これまで自分の命をこんな風に心配してくれる人間がほとんどいなかった。

同じチームの仲間と、かわいい息子ぐらいか。

その中でも、過保護な態度を見せていたのはたった一人だけだった。

同じチームの仲間であり、同時にトレーナーだった、あの男。

相手が最強であることを承知で、それでも女を想って何かと口を出してきた男。

女は、その男から耳にタコができるほど聞いた言葉を思い出す。

最強だろうと最弱だろうと、トレーニングを続けることはクローザーとして当然の責務だ。

自分はその言葉を未だにはっきりと覚えていて、

こうしてトレーニングを続けている。それはつまり……

「あの男は、今も私のトレーナーなのかもしれないわね。」



「ナレーション」

この男と女がこのジムで出会うことはおそらく無いだろう。
だが、万が一そんな奇跡のようなことが起こったとしたら、
男は女のトレーニング方法について口を出し、
女はうるさそうにしながらも男の言う通りにするのだろう。
20年以上前の、あの日々のように。
過ぎ去った時間。
多くのものが変わってしまったが、変わらないものもある。
それは、その女が人類の希望であり、
その男が女のトレーナーであるということだ。





